

令和 3 年 6 月 7 日現在

機関番号：14701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K04510

研究課題名（和文）「直接経験」に基づく都市形成モデルの研究：地方都市の立地適正化計画を事例として

研究課題名（英文）A study of a model of urban development based on 'direct experience': the case of Location Normalization Plan in regional cities

研究代表者

木川 剛志 (Kigawa, Tsuyoshi)

和歌山大学・観光学部・教授

研究者番号：50434478

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、現在の地方都市の中でも特に空襲や戦災によって破壊された都市を研究対象とし、戦後の頃に住民たちの生活の中心であった中心市街地が、高度経済成長期の都市拡大を経て、衰退していく過程を都市解析手法を用いて分析した。それは単に数値的な分析を行っただけでなく、その過程で生まれる“思い入れ”、例えば中心街で生活してきた方々が「中心街が中心街であるべきだ」と思うこと、それを「直接経験」と呼び、その「直接経験」も含めた都市空間のあり方をこの研究では考えた。そのために都市解析データと住民インタビュー、史的研究を合わせた研究成果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後の日本の都市計画では、交通計画、面的都市計画（ゾーニング）を中心に都市は形成されてきた。現在ではそこに景観の観点に加わっているが、住民の間に形成された“直接経験”による都市像は多くの場合、考慮されることはなかった。それらの都市像は主に“まちづくり”の視点で語られて、実際の都市計画とは対立軸に置かれる例が地方都市でも散見される。本研究では、文献調査と都市解析、さらにはフィールドワークを加えて、直接経験的に形成される都市像について研究した点に意義がある。

研究成果の概要（英文）： In this study, we focused on the cities that were destroyed by air raids and war among the current regional cities, and used urban analysis methods to analyse the process of the decline of the city centre, which was the centre of the residents' lives in the post-war period, after the urban expansion during the period of rapid economic growth. It is not only a numerical analysis, but also an analysis of the "feelings of attachment" that arise in the process, such as the feelings of those who have lived in the city centre that the city centre should be the city centre, which we call "direct experience", and the nature of urban space including this "direct experience". In this research, we considered the nature of urban space, including direct experience. To achieve this, we combined urban analysis data, interviews with residents and historical research.

研究分野：都市形態学

キーワード：住民の直接経験 スペース・シンタックス 横須賀市 都市像 港町 戦災復興都市計画

1. 研究開始当初の背景

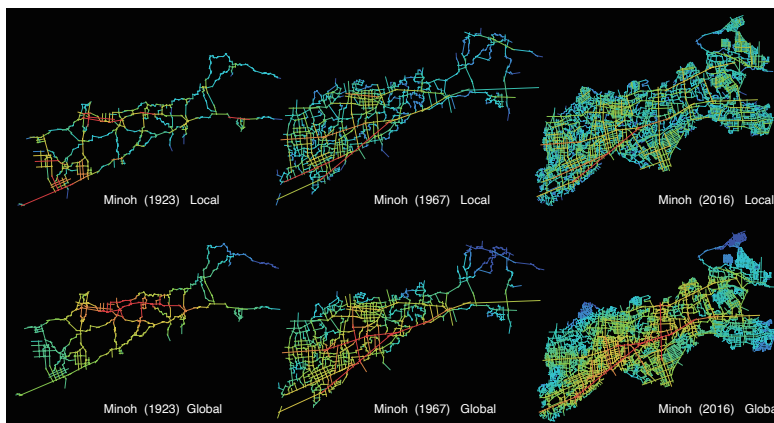
全国の地方都市では、それまでの「中心市街地の活性化」から「立地適正化計画」への計画の変換が進み、これまでとは違う新しい都市像が形成されようとしていた。

本研究の研究代表者はこの研究以前からスペース・シンタクスと呼ばれる都市解析手法を用いて、地方都市の変容過程を研究してきた。その一方で前任校の所在地であった福井市、現任校のある和歌山市の中心市街地の活性化のために地域住民、学生と一緒に様々な“まちづくり活動”も行なってきた。中心街の歴史を調べ、発掘した物語を新作落語として口演したり、監督・脚本として地域を舞台とした短編映画として製作してきた。

そして感じたことは、地方都市の中心市街地の活性化は非常に厳しいということであった。人口減少、東京一極集中といった全国的な傾向だけではなく、商店街の老朽化、若者のニーズとの乖離、店主の世代交代の失敗。それ以外にも複合的な理由が多々あり、おそらく劇的な復活を遂げる中心街は今後もでてこない。それは、かつて賑わったような中心街に再び戻ることはない、という意味であった。

これは、研究代表者がそれまでに数理で実証した研究結果とも一致していた。スペース・シンタクスはロンドン大学の Hillier を中心とした研究グループが確立した都市空間解析理論および手法であり、図1はスペース・シンタクスを用いて申請者が行った大阪府箕面市の解析の結果である。都市形状を Axial Line と呼ばれるノードに置き換え、グラフ理論を援用し位相関係における移動効率上の中心を導出する。図に示された濃く太い線が移動効率上優位な場所である。この図は現在の箕面駅が過去と比較して効率上劣位な場所となったことを示しており、ここからも衰退の理由は説明できる。都市域が広がり、拡大した新しい形状では駅前はもはや効率上の中心ではないのである。

それでは、なぜ従来の中心市街地が今も中心とされつづけるのだろうか。申請者は第二次世界大戦中に空襲を受けた地方都市を分析してきた。中心街の大部分が焼失し、新しい計画の下で復興すると新しい街が生まれ出される。しかし、実際には住民たちの空間認識は復興後も引き継がれることが多い。都市解析をすると明治以前に城下町にあった効率上の中心が鉄道敷設後は駅前に移動し、都市域が拡大した現在は旧市街を取り囲む環状線へと移る。しかし、それにも関わらず、住民たちの都市像の中では、城下町や駅前が依然として中心と認識されつづけている。移動効率が優位な地区が商業地となることを合理的とするならば、現在の地方都市は移動効率では優位ではなくなった地区に中心市街地を設定す



左の図では赤く表示された線が効率上優位な位置にあることが示されている。Localは局所的、Globalは全体での解析結果となる。2016年の解析図では箕面駅周辺の昔からの中心街は効率上は優位ではないことが結果から読み取れる。

図1. 箕面市の解析結果

る、非合理的形態である。

しかし、この非合理性は数理解析の視点からの“非合理性”である。住民に中心として認知されている以上、数理解析とは異なる論理に導かれた合理的な規範があるはずである。つまり、商店街を含めた中心市街地は既に都市機能としての合理性は失っているが、アイデンティティにおいて合理性を維持している。この集団的意識に生きる合理性を分析するには社会学的なアプローチを必要とするのではないか、と研究開始当初は考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、地方都市のこの「直接経験」を分析することによって、これまでの都市計画学のフレームを見直す契機とすることであった。日本の戦後の都市計画では、交通計画、面的都市計画（ゾーニング）を中心に都市は形成されてきた。現在ではそこに景観の観点が加わっているが、住民の間に形成された“直接経験”による都市像は考慮されることはなかった。それらの都市像は主に“まちづくり”の視点で語られて、実際の都市計画とは対立軸に置かれる例が地方都市でも散見される。本研究ではこの対立軸を発展的に解消するためにも、近代都市形成において直接経験が与えてきた影響を分析した。

3. 研究の方法

本研究では、スペース・シンタクスを主な研究手法として地方都市の中心市街地の変容を分析し、都市全体の構造を解析することによって導出される都市の中心性と境界性について議論した。また、その分析に加えて、文献や実際のインタビューによって地域住民の直接経験に基づく都市像を検討した。また、研究の重要な基礎理論として、Buberを用いた。Buberはその著書「我と汝」の中で、根元語としてI-YouとI-itを設定し、Iの位置付けを論じている。Itを論じている時のIは客観化された世界で自分を位置付け、I-Youの中では客観化されない。これを都市空間研究に適用すると、長く地方都市に住み、賑わった頃の商店街を知る人には、その街の中心街はすでに記憶に染み込まれている、この思い入れは住民の客観化された記憶の集合ではないI-Youとしての都市像である。これを空間分析に応用する。研究対象地としては「立地適正化計画」を適用している街、空襲で破壊され、その後戦災復興都市計画によって都市が形成された街などを対象とした。

ここまでが当初の手法であったが、研究代表者に2018年の8月にアメリカ合衆国に住む女性からFacebookのメッセージで、彼女の母の実母探しを依頼されることが起こった。彼女の母、木川洋子は1947年に横須賀に外国人の父親と日本人の母親の間に生まれ、5歳の時、アメリカに養子縁組で渡った。その後、66年間日本に帰国したことも、実母とあったこともなかった。彼女自身の背景を横須賀で調査し、また彼女の記憶の中でどのように風景が66年後に維持され、そして実際の故郷を歩くときどのように彼女は感じるのだろうか、と考えた。これは研究開始後の出会いであったが、研究目的と合致するので、横須賀の調査、木川洋子の帰国前と帰国後の個人的なインタビューを行った。

4. 研究成果

本研究では、地方都市の中心街が、効率上の優位性、商業上の集客力がかつてよりも失われたにも関わらず、なぜ今でも中心街として住民に認知され、行政もそれに基づいた政策を遂行するのか、その理解のためにスペース・シンタクスといった都市解析手法に加えて、社会的、映像学的視点を用いて住民に内在する都市像の抽出を試みた。

文献調査、理論研究に加えて、これまでに用いてきたスペース・シンタックス都市解析手法を用いて、複合的な構成要素から成り立つ港町の分析を行った。この研究のため、今年度は戦前、戦後を通じて社会変化によって大きく都市空間が変容した軍港や商業港を中心とした地方都市を事例としてスペース・シンタックスを用いて分析した。本研究では横須賀、宮津、室蘭、浦賀、小樽を事例として、数値分析と比較を行い、スペース・シンタックスの国際会議に投稿、査読を経て採択された。図2はその際に掲載した解析図の多色版である。この論文では規模の異なる都市の分析のためにはスペース・シンタックスの分析手法の用語ではあるがRadius=5が有効であることを示し、これは世界中に研究者がいる同研究手法でもこれまでになかった成果である。

このようなスペース・シンタックスを用いた都市解析に加えて、インタビューとフィールドワークによる研究を進めた。

名字が同じ「木川」だという縁だけで、横須賀市で外国人と日本人女性の間で1947年に生まれ、1953年に養子縁組で渡米した女性、木川洋子と知り合い、彼女の母親さがしを行った。クラウドファンディングを活用して、彼女の帰国を実現し、66年ぶりの故郷を歩いてもらい、思い出の中の風景がどのように彼女の中で記憶され、それが実際の風景と比較してどうであったか、インタビューを行った。この研究については大韓民国で開催された学会において招待講演として発表した。また、この一連の流れはテレビ局に取材され当初は情報番組の一コーナーとして放送され、のちにテレメンタリーで特集され全国放送された。

この木川洋子の66年ぶりの帰国を実現する際に行った現地調査は、地方都市の空間において住民の記憶と想像がどのようにその変容に影響を与えてきたのか、考える契機となった。スペース・シンタックスによる空間分析に加えて、社会学的、映像学的な視点を用いて住民に内在する都市像の抽出を試みている。この研究では、母親探しの調査は、現地の住民へのインタビューなどを伴い、一連の研究として分析し、「戦後期横須賀における米軍属と地域住民」として分担執筆した著書にて発表した。この論文の中では、いわば負の歴

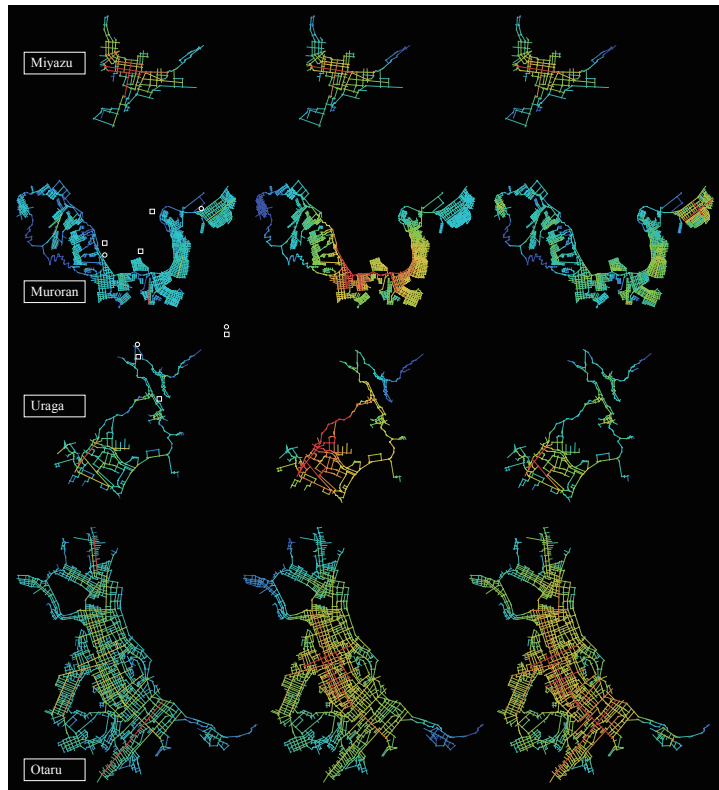


図2. 港街の解析結果

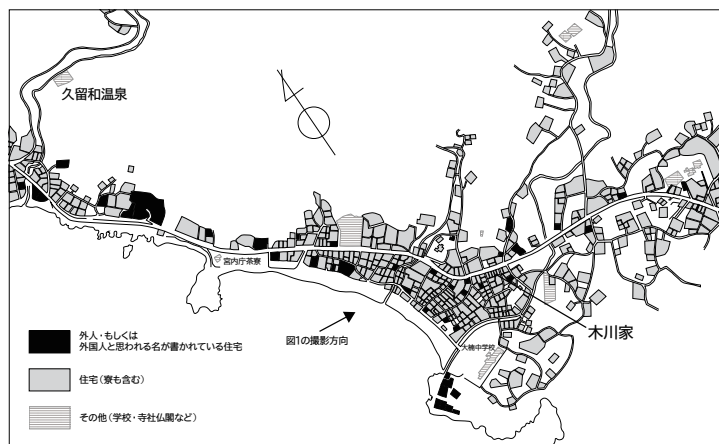


図3. 外国人と同居する女性たちの居住状態

史と考えられる戦後の外国人相手の歓楽施設の配置や、外国人と同居する女性たちの居住状態(図3)を調査し、その背景を調査し、まとめている。この調査自体は住民の記憶に委ねられている部分が多く、根拠が薄くとも、記述しなければこの先、検証が不可能な事象をどのように今後研究すべきか、その議論も同論文の中で検討している。また、この調査をまとめた映像は、映画「Yokosuka1953」として仕上げ、その中編版を世界の映画祭へ応募した。その結果、最優秀グランプリ映画賞を含む受賞を受けている。2021年度以降に長編映画として完成させ、広く公開予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Tsuyoshi KIGAWA, Kyung Wook SEO	4. 巻 -
2. 論文標題 Decoding Urban Kernel in Japanese Port cities by means of Space Syntax	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the 12th International Space Syntax Symposium	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Tsuyoshi Kigawa
2. 発表標題 The effect of image and memory for urban scenery
3. 学会等名 Korea Institute of ecological architecture and environment（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 木川剛志, 編集 中川理、空想から計画へ編集委員会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 750
3. 書名 戦後期横須賀における米軍属と地域住民 in 「空想から計画へ」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Kigawa, Tsuyoshi (2020): Yokosuka1953, Journey to her mother in memory、監督木川剛志、中編バージョン、Reykjavik Visions Film Festival最優秀長編ドキュメンタリー映画賞、Vesuvius International Film Festival最優秀ドキュメンタリー脚本賞、Crown Wood International Film Festivalオフィシャルセレクション

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------